



▲早朝練習の前にボートの点検整備を行う円山川城崎ローイングクラブのメンバー

「ボートのまち城崎」を全国に発信したい

9月30日、いよいよのじぎく兵庫国体が開幕します。ボート競技が開催される城崎町で、競技者として練習に励むとともに、ボート競技の普及推進にも取り組んでいる一人の男性を紹介します。

ゆうき 結城 英和さん(30歳) 城崎町湯島在住

心奪われた小学校のボート体験

豊岡市の中央部を悠々と流れる円山川。この河口付近にある円山川城崎漕艇場を舞台にしてのじぎく兵庫国体のボート競技が繰り広げられます。開幕を直前に控え、同漕艇場では出勤前の早朝練習に励むのは円山川城崎ローイングクラブの皆さん。その中で一際明るく振舞っているのが、本クラブ代表の結城英和さんです。結城さんは厳しい練習の中でも場の雰囲気や和ませる存在です。

結城さんがボート競技を始めたきっかけは、小学校6年の時に参加した親子ボート教室です。

「こんなに楽しいスポーツ



▲家業の旅館業を営む傍ら、日々ボートの練習に励む結城さん。過去4回の国体出場経験を持ち、兵庫国体では成年男子舵手付きフォアの監督も務める。競技者の立場ともてなしの気持ちで兵庫国体の開催に臨む

但馬で唯一の社会人チームを発足

その後も高校、大学とボート競技に打ち込み、「地元・城崎の名を全国にアピールしたい」との思いから、平成10年にはたった一人で円山川城崎ローイングクラブを発足させ、国体予選に挑みました。それから8年、徐々にメンバーが増え、現在は7人で活動し但馬地域で唯一の社会人チームにまで成長しました。同クラブメンバーから兵庫国体に出場する選手もいるなど、地域住民からも大きな期待が寄せられています。

疾走感・一体感・達成感がたまらない

ボート競技は1人から9人が乗り込み、乗り込んだ人数によりそれぞれ競技種目が異なります。国内レースでは1、000メートル先のゴールを目指して、複数のチームが同時にスタートし、どのチームが一番先にゴールラインに到達できるかを競います。

「ボート競技はエースのいない究極の団体競技です」と結城さん。ボート競技は、乗り込んだメンバーとすべて同じ動きをしなければまったく前に進みません。一人だけが力強くオールを漕いでもリズムが崩れてしまい、メンバーと息を合わせる事がとても大切なスポーツです。

また、ボート競技の魅力は、時速20から30キロメートルにも達する水上を飛ぶような疾走感、メンバーと力を合わせることで生まれる一体感、そして自分の力を最大限に出し切った時に得られる達成感にあります。



▲兵庫国体開幕を直前に控え、指導に熱が入る(一番上)結城さん

ボート競技を続けられる環境づくりを

国体代表入りを目指し選手活動を続ける一方、結城さんは、「城崎から全国に誇れる選手を輩出したい」と地元高校生や豊岡出身の大学生などの後進育成にも力を注いでいます。

「これまでは、中学校でボートの楽しさを知っても、その腕を生かせる進学先が限られ、ボートを続けるににくいという問題がありました。今後、私たちのクラブがそうした人たちの受け皿となるよう、活動をさらに活性化するとともに、初心者の方にも親しんでもらえるような機会づくりを展開していきたいと思っています」と語る結城さん。夢に向かって今日も力強くオールを漕いでいます。